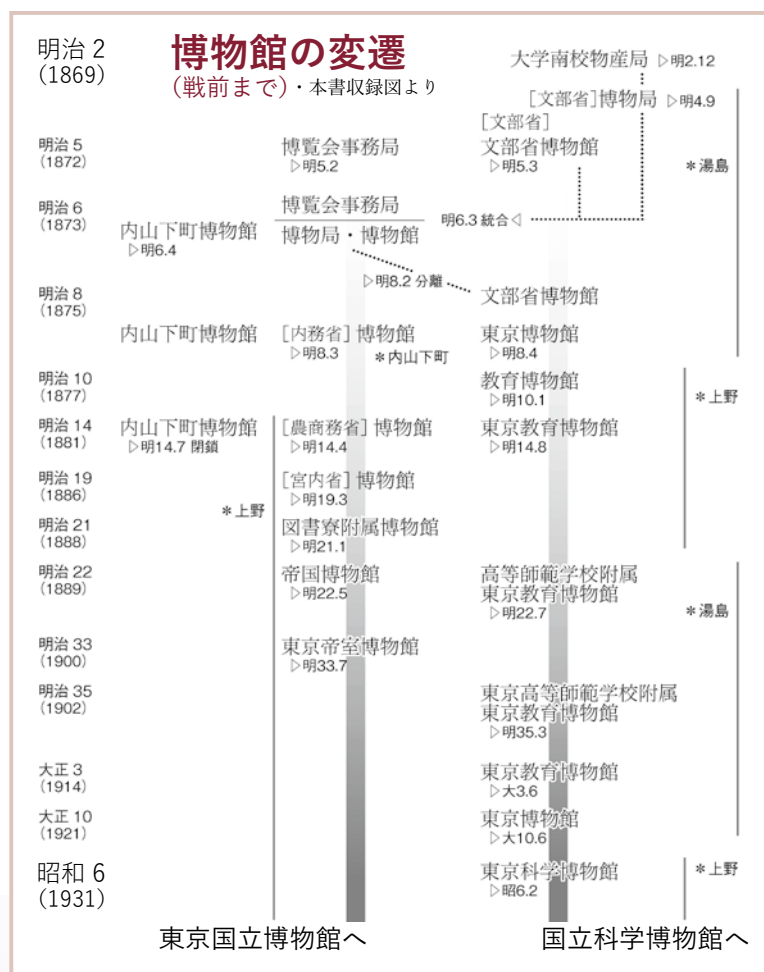


# 日本工業博物館史 の研究

馬渕浩一 著

“日本の”博物館 再考 求め・問われつつける博物館の“コンセプト”



## ■本書の主な関連歴史事項

- 明治 39 (1906) ドイツ博物館 暫定的コレクション公開
- 明治 44 (1911) 愛知県商品陳列館 開館
- 大正 元 (1912) 「工業発達助長ニ関スル件」諮問
  - 6 (1917) 機械学会「機械工業発達助長案」
  - 7 (1918) 工学会「工業教育刷新案」
  - 10 (1921) 「科学知識普及ニ関スル建議案」
  - 13 (1924) 長岡高等工業学校 開校
  - 14 (1925) 東京市電気研究所・電気博物館 開館
  - 15 (1926) 長岡高等工業学校附属科学工業博物館 竣工
- 昭和 4 (1929) ミラー「科学及び工業の博物館」講演
  - 7 (1932) 東京科学博物館別館(工業館)仮公開
  - 8 (1933) 日本工学会、工業博物館設立計画
  - 10 (1935) 紀元二千六百年記念日本万国大博覧会 開設計画(万博協会)
  - 39 (1964) 市立名古屋科学館 全館開館

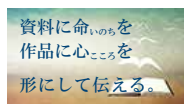
永年、博物館業務に従事してきた著者だからこそその視点をもって  
膨大な史料文献・データを整理し鋭く歴史の核心に迫る。  
科学技術・産業そして行政・教育の広範囲にわたる論究から  
近代日本の文化・思想の課題があぶり出されてくる。



明治以降、幾度となく提案されてきた日本の工業博物館設立計画、しかし  
いまだ実現されないのはなぜなのか？

## 工業博物館

文化財としての工業資料を保存・展示し次世代に継承する



学術資料出版

大空社出版

www.ozorasha.co.jp

# 日本工業博物館史 の研究

馬渕浩一 著

近代日本の博物館の歴史に浮かび上がる  
“工業博物館”構想に関わった  
官民・学術・教育の人々の営為  
その“意欲”をすくい上げる  
ユニークな近代日本文化史研究



\* 大空社出版 2023年10月刊

読者へ



いったん工業的価値が減滅しても新たに文化的な価値が生じる。そのような無形の文化的価値を再構成して提示する場が

工業博物館なのである。

——終章 工業博物館の実現に向けて より

## 本書の

執筆が佳境に入った令和4（2022）年の秋、東京国立博物館で創立150周年記念特別展が開催された。この特別展は同館が所有する89点の国宝すべてを含む名品と諸資料を公開する一大展覧会であり、洗練された感性に支えられ独自の美を放つ美術・工芸部門の作品群、歴史を雄弁に語る発掘品、原書などを目の当たりにして圧倒的な感銘を受けた。翻って未だ工業博物館が設立されていないことに対し改めて残念な思いがこみ上げてきた。工業教育や科学技術振興などを主目的とせず、文化財としての工業資料を保存、展示し、次世代に継承する工業博物館が設立され、歴史・美術の博物館と対等な評価が与えられる日が来ることを切望してやまない。

## 博物館の

普遍的な目的とは何か。それは貴重な資料を収集し保存して次世代に継承していくことである。工業博物館の場合でいうと、工業資料を文化財として認知し保存継承を図ることである。この視点に立ち、工業博物館を実現するための具体的方策についても本書で言及したいと思う。

著者

——まえがき / あとがきより抜粋構成

● 著者 馬渕浩一 まぶち・こういち

現在、名古屋大学大学院教育発達科学研究科附属生涯学習・キャリア教育研究センター研究員、名古屋工業大学大学院および放送大学非常勤講師。博士（工学）。

1957年、名古屋市生まれ。1983年、市立名古屋科学館（現名古屋市科学館）勤務、2021年3月、名古屋市科学館（主任学芸員）退職。著作に『日本の近代技術はこうして生まれた：産業遺産をヒントに考える』（玉川大学出版部1999）、『技術革新はどう行われてきたか：新しい価値創造に向けて』（日外アソシエーツ2008）など。共著に『日本の機械工学を創った人々』（前田清志編、オーム社1994）、『日本の技術革新大系』（国立科学博物館2010）など。

# 総合知としての博物館 工業博物館史からの再認識へ

長崎歴史文化博物館館長  
日本ミュージアム・マネージメント学会会長

水嶋英治

本書は、日本における工業博物館の歴史と現状を検討した学術書である。著者馬淵浩一氏は、明治時代から昭和戦後までの工業博物館設立運動や工業教育改革運動を、政治・経済・社会・文化の各方面から分析したが、こうした総合知としての博物館を俯瞰的に見た研究はこれまで存在しなかった。本書の中では、各地域の工業発展や科学技術振興に寄与した博物館や陳列所の事例も豊富に紹介されている。さらに、日本の工業博物館がドイツ博物館などの海外のモデルからどのように影響を受けたのか、なぜ工業博物館がわが国で実現しなかったかについて総合的に考察したのは、碩学馬淵氏だから成せる技というほかない。前代未聞の壮挙と言えるよう。工業博物館が日本で実現しなかった原因として、本書は、工業のそれぞれの発展段階において、実利的な目的が強調されたため、博物館と博覧会を混同（ないし同一視）して、コレクションの形成を怠った、と指摘している。

日本の工業史や科学技術産業史に関心のある読者にとって、本書は貴重な基礎文献となることであろう。工業博物館は、科学文化や技術遺産を保存・展示・教育する場であり、国民の科学技術理解や産業振興にも寄与する役割を果たす機関である。しかし、日本では戦争や経済危機などの社会的要因、理科教育や科学技術振興などの政策的要因も存在した。そうした背景や原因を明らかにし、今後の工業博物館のあり方について示唆を与えるてくれる必読の一冊である。

## 構成 (目次抄)

|           |                                                                                                 |
|-----------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 序 章       | 西欧における工業博物館の歴史 / 研究の問題意識                                                                        |
| 第一部       | 明治政府の博物館政策と地方行政による陳列所の展開 (明治)                                                                   |
| 第1章       | 殖産興業と明治の博物館政策 工芸博物館設立計画の阻却<br>博覧会と博物館の黎明：試行的なコレクション形成 / 上野の博物館：歴史・美術博物館への傾斜                     |
| 第2章       | 手工業から工場制工業への転換を促した愛知県商品陳列館と県下の織物業<br>陳列所と工業博物館 / 山口貴雄の運営方針 / 愛知県の工業                             |
| 第二部       | 試験研究機関と高等工業学校に附属した工業博物館 (大正)                                                                    |
| 第3章       | 東京市電気研究所附属電気博物館の設立と文部省による博物館政策の変化<br>科学博物館・理化博物館を求める声の高まり                                       |
| 第4章       | 長岡高等工業学校附属科学工業博物館による地域の機械工業支援<br>長岡市の産業構造転換：石油掘削から機械工業へ / 長岡工業相談所による地域産業への技術指導                  |
| 第三部       | ドイツ博物館の紹介と工業博物館設立運動 (昭和・戦前)                                                                     |
| 第5章       | 機械工学者らの唱導による工業教育改革運動と東京科学博物館の設立<br>東京博物館から東京科学博物館へ / 学術団体による工業教育改革案と工業博物館 / ドイツ博物館の情報の入手とその動機   |
| 第6章       | 日本工学会による工業博物館設立計画<br>機械学会の工業博物館設立運動 / 工業博物館設立計画の挫折                                              |
| 第7章       | 紀元二千六百年記念日本万国博覧会を契機とした工業博物館設立計画<br>博覧会開催の要望から中止に至る政治過程 / 陳列館の恒久化による工業博物館設立計画 / 東京科学博物館の拡張計画への転換 |
| 第四部       | 戦後の工業博物館設立運動とその変容 (昭和・戦後)                                                                       |
| 第8章       | 清水勤二の唱導による市立名古屋科学館の設立 科学技術振興と工業博物館<br>文部省科学教育局長、名古屋工業大学設立 / 技術者養成の声の高まり                         |
| 第9章       | 1960～1990年代の科学館の変化 工業博物館からの離反<br>1960年代：理科教育支援と科学技術振興 / 1980～1990年代設立の科学館の類似性                   |
| 終 章       | なぜ工業博物館が設立されなかったのか / 工業博物館の実現に向けて                                                               |
| 引用・参考文献一覧 | 索引                                                                                              |

●詳細内容は後掲

\*図表54点収載

各種変遷・概要・分類・数量データから  
組織・人物略歴・社会背景を明解に提示



\* 大空社出版 2023 年 10 月刊



# 日本工業博物館史 の研究

馬淵浩一 著

近代日本の博物館の歴史に浮かび上がる  
“工業博物館”構想に関わった官民・学術・教育の人々の営為

明治以降、幾度となく提案されてきた日本の工業博物館設立  
計画、しかしいまだ実現されないのはなぜなのか？

永年、博物館業務に従事してきた著者だからこそその視点で、  
膨大な史料文献・データを整理し、鋭く歴史の核心に迫る。

A5 判・265 頁・並製・カバー  
978-4-86688-236-9

定価 3,850 円  
(本体 3,500 円 + 税 10%)

\* 読みやすい・明解な文章

\* 有益・豊富な図表(54 点)

各種変遷・概要・分類・数量データから  
組織・人物略歴・社会背景を明解に提示

## 関連する キーワード

博物館学 商品陳列館 万国博覧会 科学館 美術館 伝統 保存  
コレクション 寄贈・委託品 実物展示 価値 実験室 プラネタリウム  
殖産興業 科学技術 工業教育 理科教育 学芸員 社会教育 生涯学習  
科学振興 産学協同 産業遺産 企業博物館 国家と地方 日本近代史

## 博物館基本文献集

全21巻・別巻1

残部  
数組

(2023.9)

監修 伊藤寿朗

(大空社 1990-1991 復刻刊行。全 2 回配本)

### 近代日本の博物館を造り支えてきた 博物館の理論・思想と実践の歴史を一望

博物館が組織的な取り組みを開始した 1920 年代  
から 1950 年代までを主な対象に、理論書、啓蒙  
書などの単行本、パンフレット、戦前の海外植民  
地の館を含む案内書、統計資料など網羅的に復刻

A5/B5 判・上製

揃定価 218,900 円 (本体 199,000 円 + 税 10%)



学術資料出版

## 大空社出版

www.ozorasha.co.jp

eigyo@ozorasha.co.jp

TEL:03-5963-4451

FAX:03-5963-4461

(〒114-0032) 東京都北区中十条 4-3-2

\*お  
取  
扱  
い

# 日本工業博物館史の研究

馬淵浩一 著

[大空社出版 2023 年 10 月刊] A5 判・265 頁 978-4-86688-236-9 定価 3,850 円 (本体 3,500 円 + 税 10%)

## 詳細目次

[主要キーワード]

まえがき i

序章 西欧における工業博物館の歴史 / 研究の問題意識 / 先行研究 1

### 第一部 明治政府の博物館政策と地方行政による陳列所の展開 (明治)

第 1 章 殖産興業と明治の博物館政策 工芸博物館設立計画の阻却 13

- 1 明治の博物館政策を検討する前提 [博覧会 幕末]
- 2 明治初年の博覧会と博物館の黎明 試行的なコレクション形成 [町田久成 田中芳男 物産会 最初の博覧会 内山下町博物館]
- 3 殖産興業と博物館構想 [博覧会事務局 佐野常民 ウィーン万国博覧会 工芸博物館 大久保利通]
- 4 上野の博物館 歴史・美術博物館への傾斜 [農商務省博物館]
- 5 専門博物館へ分化 歴史・美術博物館と自然史博物館へ [宮内省博物館 文部省博物館]

第 2 章 手工業から工場制工業への転換を促した愛知県商品陳列館と県下の織物業 47

- 1 陳列所と工業博物館
- 2 愛知県商品陳列館の設立 [機械館・動態陳列]
- 3 山口貴雄の運営方針
- 4 愛知県の工業 [紡織 原動機 電動機 力織機]

### 第二部 試験研究機関と高等工業学校に附属した工業博物館 (大正)

第 3 章 東京市電気研究所附属電気博物館の設立と文部省による博物館政策の変化 71

- 1 科学博物館・理化博物館を求める声の高まり [国立博物館建設建議]
- 2 東京市電気研究所の設立 [東京電燈 積算電力計検定 関東大震災 ラジオ放送]
- 3 電気博物館の開館
- 4 各地の博物館に向けた文部省の視線の変化 [商品陳列所改造論 棚橋源太郎]

第 4 章 長岡高等工業学校附属科学工業博物館による地域の機械工業支援 89

- 1 長岡市の産業構造転換の略史 石油掘削から機械工業へ [東山油田 工作機械工業]
- 2 長岡高等工業学校の開校 [福田為造 科学工業博物館]
- 3 長岡工業相談所による地域産業への技術指導 [鉄工業]

### 第三部 ドイツ博物館の紹介と工業博物館設立運動 (昭和・戦前)

第 5 章 機械工学者らの唱導による工業教育改革運動と東京科学博物館の設立 111

- 1 東京博物館から東京科学博物館へ
- 2 学術団体による工業教育改革案と工業博物館 [農商務省生産調査会 機械学会 工学会連合工業調査委員会 工政会 佐野利器]
- 3 ドイツ博物館の情報の入手とその動機 [加茂正雄]
- 4 東京科学博物館とドイツ博物館 [秋保安治]

第 6 章 日本工学会による工業博物館設立計画 141

- 1 機械学会による工業博物館設立運動 [斯波忠三郎 オスカ・フォン・ミラー講演]
- 2 日本工学会による工業博物館設立計画
- 3 工業博物館設立計画の挫折

第 7 章 紀元二千六百年記念日本万国博覧会を契機とした工業博物館設立計画 153

- 1 日本万国博覧会開催の要望から事実上の中止に至る政治過程 先行研究の整理
- 2 日本万国博覧会の陳列館の恒久化による工業博物館設立計画 [阪谷芳郎]
- 3 東京科学博物館の拡張計画への転換 [文部省 学術的な陳列品選定]

### 第四部 戦後の工業博物館設立運動とその変容 (昭和・戦後)

第 8 章 清水勤二の唱導による市立名古屋科学館の設立 科学技術振興と工業博物館 175

- 1 清水勤二の略歴 [ドイツ留学]
- 2 文部省科学教育局長時代の清水勤二 [戦後教育改革 アメリカ対日教育視察団 学術体制刷新]
- 3 名古屋工業大学の設立と清水勤二
- 4 技術者養成の声の高まりと清水勤二 [中央教育審議会 産学協同]
- 5 市立名古屋科学館の設立 [既存の理工系博物館 市政 70 周年記念事業 資金調達]

第 9 章 1960 ~ 1990 年代の科学館の変化 工業博物館からの離反 209

- 1 研究対象の特定
- 2 1960 年代における科学館の設立 理科教育支援と科学技術振興
- 3 1980 ~ 1990 年代における科学館設立 [教育委員会所管]
- 4 1980 ~ 1990 年代に設立された科学館の類似性 [展示・教育普及活動 / 利用者面積の変化]

終章 なぜ工業博物館が設立されなかったのか / 工業博物館の実現に向けて 231

引用・参考文献一覧 238 あとがき 257  
索引 258-265

## 主な図表 (全 54 点より)

〈1 章〉博物館の変遷・戦前まで (図) 〈2 章〉愛知県商品陳列館 (写真) / 愛知県三大織物工場集積地における原動機の変化 〈3 章〉電気博物館開館後 5 年間に開催した展覧会の概要 〈4 章〉長岡高等工業学校附属科学工業博物館 (写真)・陳列品概要・開催展覧会 〈5 章〉東京科学博物館工業館 (写真)・陳列品 / 工業教育改革案と委員会・委員 / ドイツ博物館開館までのコレクション公開 〈6 章〉ミラーの講演 (写真) / 工業博物館調査委員会委員 / 日本工学会指名委員 〈7 章〉紀元二千六百年記念日本万国博覧会機械館・電気館・化学工業館の出品部類 〈8 章〉市立名古屋科学館 (写真) と同館以前に開館した戦後の理工系博物館 〈9 章〉大規模科学館の基本データ / 科学館を有する地方自治体における博物館、美術館、科学館設立状況 / 7 都市教育委員会予算と学校整備費の変化・7 市児童生徒数の変化 / 展示室・コーナー名と床荷重 / 展示手法と内容の変化 / 主要科学館の延床面積に対する利用者使用部分の面積比率 / 科学館の変化とその背景・1960 ~ 1990 年代 (図)

# 博物館基本文献集

全 21 巻・別巻 1

監修 伊藤寿朗 (大空社 1990-91 復刻刊行)

揃定価 218,900 円 (本体 199,000 円 + 税 10%)

残部  
数組

(2023.9)

## \* 全収録文献一覧

日本の博物館を造り支えてきた  
博物館の理論・思想と実践の歴史を一望

博物館が組織的な取り組みを開始した  
1920年代から1950年代までを主な対  
象に、理論書、啓蒙書などの単行本、パン  
フレット、戦前の海外植民地の館を含む案  
内書、統計資料など網羅的に復刻

- 1 眼に訴へる教育機関 棚橋源太郎 (1930)
- 2 郷土博物館 棚橋源太郎 (1932)
- 3 仏蘭西博物館制度の調査 文部省 (1929)
- 4 新博物館態勢 藤山一雄 (1940)
- 5 博物館 浜田青陵 (1929)
- 6 博物館講習会要項 文部省 (1929)  
年表 我国に於ける郷土博物館の発展 (稿)  
大日本聯合青年団郷土資料陳列所編 (1936)  
米国内各博物館の教育事業に就いて 星合正治 (1932)
- 7 商品陳列所綜覧 (第二回版) 商品陳列所聯合会編 (1933)
- 8 欧米博物館の施設 後藤守一 (1931)
- 9 常置観覧施設一覧 (昭和四年) 文部省普通学務局  
教育的観覧施設一覧 (昭和五~一五年) 文部省社会教育局  
教育的観覧施設一覧 (昭和一七年) 文部省社会教育局
- 10 常置教育的観覧施設状況 (大正五年十二年) 文部省普通学務局 (1927)
- 11 世界の博物館 棚橋源太郎 (1947)
- 12 新しい博物館 その機能と教育活動 木場一夫 (1949)
- 13 博物館学綱要 棚橋源太郎 (1950)
- 14 見学・旅行と博物館 木場一夫ほか (1952)
- 15 博物館教育 棚橋源太郎 (1953)
- 16 博物館・美術館史 棚橋源太郎 (1957)
- 17 博物館 棚橋源太郎 (1949)
- 18 博物館のはなし 青木国夫 (1957)
- 19 わたしたちの歴史研究 博物館 関忠夫 (1957)
- 20 文化観覧施設一覧 (昭和二十三年三月三十一日現在) 文部省社会教育局  
昭和二十六年一月二十日現在 公私立博物館等調査表 文部省  
博物館調査 (昭和 28 年 5 月 1 日現在) 文部省
- 21 観光資源要覧 第四編・陳列施設 運輸省観光局 (1957)  
昭和二七年度学芸員講習講義要綱 文部省  
学芸員講習講義要綱 (昭和二八年) 文部省社会教育局

## 別巻

### 博物館学総論・各巻解説 他

伊藤寿朗先生のご逝去を悼む：『博物館基本文献集』の完結にあたって (野村東太)

- I 博物館学総論 (126 頁) 鶴田総一郎 (『博物館学入門』〔理想社、1956・昭和 31 年〕より・付「執筆した経緯」)
- II 各巻解説 (169 頁) 棚橋源太郎著作解説〔1・2・11・13・15~17 巻〕(君塚仁彦)/3 巻(山崎晶子)/4 巻(後藤和民)/5 巻(黒尾和久)/6 巻(北村敏・山崎)/7 巻(小野一之)/8 巻(武士田忠)/9・10 巻(伊藤寿朗)/12・14 巻(小野)/18・19 巻(伊藤暢直)/20・21 巻(伊藤寿朗)/21 巻(伊藤寿朗・柘植信行)
- 病床の傍らで聞いたこと：伊藤寿朗先生と『博物館基本文献集』(君塚仁彦)
- 博物館関係単行書目録 (志澤政勝編) (14 頁)

大空社出版

eigyo@ozorasha.co.jp

TEL:03-5963-4451